The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学習者の類別詞習得についての予備的調査 ：I-JAS第二次データを対象に
Author(s)	眞野, 美穂
Citation	現代日本語研究. 2025, 16, p. 35-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語学習者の類別詞習得についての予備的調査
―I-JAS第二次データを対象に―

A Pilot Study of Classifier Acquisition among L2 Learners of Japanese:
An Analysis of the Second Data from I-JAS

眞野　美穂
MANO Miho

キーワード：類別詞，助数詞，I-JAS，類別詞言語，日本語学習者

要　旨

本稿は，日本語学習者の類別詞の習得上の特徴について，「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の第二次データを対象に検討した。類別詞について異なる類型的特徴を持つ４つの言語（英語・トルコ語・中国語・韓国語）を母語とする日本語学習者の類別詞使用について比較を行い，使用頻度には母語の影響と日本語能力による差異が観察されることを指摘した。習得が進むほど，使用する類別詞の種類および用法の種類が増えることが観察されたが，それに影響を与える要因については，さらなる調査が必要である。本稿は，予備的調査として，今後類別詞の習得過程を解明するための調査上の課題も明らかにした。

１．はじめに

本稿は，類別詞の第二言語習得上の特徴とその過程の解明への第一段階として，日本語学習者の類別詞の習得上の特徴について，「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（International Corpus of Japanese as a Second Language, 以降 I-JAS)」のデータを対象に検討する。類型の異なる４つの言語を母語とする学習者のデータを対象に調査を行い，その共通点と差異，それに関わる要因，そして今後の調査に関わる課題を明らかにすることを目的とする。

Aikhenvald (2000)は，ほぼ全ての言語が名詞類の範疇化(categorization)を示すための何らかの文法的手段を持つことを指摘し，その名詞の範疇化の手段

を広い意味での「類別詞（classifier)」と呼ぶ。日本語はその手段の１つとして「助数詞」を持ち，(1)のように，対象が表す意味によって異なる助数詞を数詞と共に使用する。これは，Aikhenvald (2000)の用語では「数量類別詞(numeral classifier)」に相当するものである（詳しくは2.1節を参照)。

(1) a. ３{つ/本/*粒/*匹}の論文
　　b. ３{*つ/*本/*粒/匹}の猫

そのため，日本語学習者はそれぞれの助数詞がどのような対象の数量を表すことができるかを学ぶ必要がある。

I-JASは，12の異なる言語を母語とする学習者を対象とした学習者コーパスであるが，本稿で分析するのは，異なる語族に属し，Aikhenvald (2000)のいう「類別詞」に関して異なる類型的特徴を持つ４つの言語（英語・トルコ語・中国語・韓国語）を母語とする第二次データである。これらの言語を母語とする学習者同士，そして日本語母語話者とを比較し，特徴を分析する。このことにより，第二言語学習者の日本語の「類別詞」の習得における特徴とそれに影響を与える要因を探るための予備的調査とする。

２．類別詞に関わる言語類型

２．１．日本語の類別詞

２．１．１．日本語の類型と類別詞

日本語では，数量を表す際，(1-2)から分かるように，基本的に助数詞が必要である。言い換えると日本語は，数量表現と義務的に現れる助数詞を持つ。そのため，類型的には「数量類別詞」を持つ言語に分類される（Aikhenvald 2000, 西光・水口 2004)。(3)の英語のように直接名詞を数詞で修飾することは基本的に許されない。そして，数詞と組み合わされた助数詞全体（例：３人）が，数量表現として働く。

(2) {３人/*３}の子ども
(3) three children

しかし，日本語の助数詞がすべて名詞の範疇化を行うわけではない。助数詞の中には，対象に意味的な制限を持つもの(4)と持たないもの(5)が存在する。

(4) ３人の{小人/*猫/*水/*紙}
(5) 500g の{小人/猫/水/紙}

日本語の助数詞については,これまでいくつかの下位分類が提案されてきた(松本 1991, Matsumoto 1993, Downing 1996, 飯田 1999, 西光・水口 2004 他)。影山他(2011)は,助数詞を範疇化と個別化(individuation)という機能から,「類別詞 (numeral classifiers)」と「計量詞 (measure specifiers)」に分類する。「対象の性質を類別して特定し,その数を数えるもの(範疇化を行うもの)」が「類別詞」であり,「何らかの基準により元が不定量の物質に境界を作り，量り取り，量を示すもの（個別化を行うもの)」が「計量詞」である。それぞれの例を，(6)に示す。

(6) a. 類別詞：-人，-匹，-頭，-本，-枚，-個，-戸，-台
b. 計量詞：-束，-パック，-箱，-切れ，-キロ，-リットル

類別詞は対象の性質に指定を持つため，その性質を持たない対象を数えることはできないが，計量詞は各計量詞の指定する方法で個別化できるものであれば対象を問わず，その数量を表すことができる。本稿が対象とするのは，この分類における「類別詞」である。なぜなら，学習者にとって，より習得が難しいのは，その対象への指定を理解する必要がある「類別詞」であると考えられるからである。これ以降,「類別詞」という用語を，範疇化の機能を持つ助数詞を指すものとして使用する。

２．１．２．類別詞の機能

先に述べたように，日本語の助数詞は基本的に接辞であり[1)]，数詞に付加され，数量表現として働く（本稿では，数詞についた類別詞（例：１匹）のことも，以降便宜的に「類別詞」と呼ぶことにする)。

類別詞は，(7)のように統語的に様々な位置に生じることができる。先行研究によっても，それぞれの用法をどのように呼ぶかは異なっており，それぞれの文中での機能や,文全体における解釈も違うことが指摘されている(奥津 1983, Downing 1996, 岩田 2013, 田中 2015, 眞野 2021 他)。しかし，本稿では学習者の使用の傾向を見るという目的と紙幅の関係上，その機能に着目した本稿における用法名を，例と共に(7)に示すに留める。

(7) a. 単独：３人が賛成した。
b. 連用（修飾）：学生が３人賛成した。
c. 連体（修飾）：３人の学生が賛成した。
d. 同格：学生３人が賛成した。
e. 並置：３人学生が賛成した。
f. 被連体（修飾）：学生の３人が賛成した。

(7e)について，水口(2004)や岩田(2013)は(7b)の構造から数量詞が前に置かれているものとしているが，学習者の表現においては，(7c)のノ格の省略もしくは未習得の可能性も否定できないため，区別しておきたい。

２．２．類別詞の言語類型

次に，本稿が対象とする学習者の母語の特徴について概観する。ほとんど全ての言語が何らかの形で名詞類の範疇を表す手段を持つとはいえ，その手段には違いがある。「数量類別詞」を持つかどうかという観点で考えると，本稿が対象とする学習者の母語である英語・トルコ語・中国語・韓国語は，それぞれ異なる特徴を持つ。

まず，インド・ヨーロッパ語族に属する英語は，(3)のように，直接数詞で対象を表す名詞句を修飾することができ，数量類別詞のような文法要素は持たない。可算性が高い名詞には直接数詞をつけ，数量を表すことができる。ただし，可算性が低い名詞の場合は，(8)のように計量表現を使い，数量を表すという特徴がある（影山他 2011 も参照）。

(8) a. three cups of coffee
b. 200g of coffee

次に，アルタイ語族に属するトルコ語は，名詞に単複の区別を持ち，数量類別詞は持つものの，(9)のようにその使用は任意であるという，日本語とは異なる特徴がある。そのため，数詞が名詞を直接修飾することも可能である(Turgay 2020)。類別詞を(10)のように対象である名詞句から離すことも可能である。

(9) iki (tane) öğrenci (Turkish, optional CL) (Turgay 2020:1)
two CL student
'two students'

(10) a. [Üç tane] öğrenci gel-di. (Turkish) (同上:19)
three CL student come-PST
b. Öğrenci gel-di [üç tane].
student come-PST three CL
Both: 'Three students came.'
c. *[Tane öğrenci] gel-di üç.

一方，シナ・チベット語族の中国語は，日本語と同様，義務的な数量類別詞を持つ言語である。

(11) sǎn ge rén "three people" (Aikhenvald 2000:99)
three CL person

中国語の数量類別詞は，指示詞や形容詞と共に現れることも可能である点で，日本語とは異なる性質を持つ（Yi 2021)。また，現れる場所が基本的に対象を表す名詞の直前である点においても（Yi 2021, 曹 2023)，多様な場所に生じることが可能な日本語の類別詞とは異なる性質を持つ。

最後に，韓国語だが，日本語と同様に数量類別詞を持つ言語である。韓国語の類別詞は日本語と同様に多様な統語的位置に生じることができる点では，日本語と類似しているが（Aikhenvald 2000, Yi 2021, Lee 2021)，類別詞によっ

ては(12)のようにその使用が任意である場合もあること，名詞句外に生じた場合，(13)のように格標識を付与できることなど，日本語との違いも見られる。

(12) a. haksayng twu myeng “two students” (Yi 2021:16-17)
student 2 CL
b. twu myeng-uy haksayng “two students”
2 CL-GEN student
c. haksayng twul “two students”
student 2
d. twu haksayng “two students”
2 student

(13) yenpjil-lul ecey sey calwu-lul sa-ss-ta.
pencil-ACC yesterday three NUM.CL:LING.SLENDER-ACC buy-PAST-DEC
“I bought three pencils (not other items) yesterday.”
(Aikhenvald 2000:107)

このような，類別詞に関して異なる，もしくは類似した類型的特徴を持つ言語を母語とする学習者により日本語における類別詞の使用には，どのような共通点や差異が見られるのだろうか。

２．４．類別詞の第二言語習得研究

類別詞について，どのように第二言語において習得が行われるのかについては，徐々に研究が進んできている。しかし，日本語学習者を対象とした研究は限られており，その調査対象も限定的であるという課題がある。

濱野・佐野(2008)は，「-本」について英語母語日本語学習者に質問紙調査を行い，基本的な意味の一部しか習得されていないことを指摘しているが，他の助数詞の場合や日本語能力との関係に課題が残されている。また，中国語と日本語でその使用に差が見られる数詞「一」を取る類別詞に着目した学習者言語の研究も見られ，倉品(2009)は中国語母語日本語学習者の作文から，「一」を含む数詞節に対し，正誤判定・誤用訂正の調査を行い，中国語からの正の転移を指摘している。さらに，曹(2023)は，I-JAS と「YNU 書き言葉コーパス」を対象

に，日本語母語話者と中国語母語日本語学習者の数量表現について比較し，数量詞使用量については大きな差が見られないこと，そして中国語話者は，中国語と形が同じで意味も中国語に近い助数詞を好んで選んでいることを指摘している。しかし，他の母語話者との比較なしでは，その特徴について結論づけることは難しい。現状では異なる母語を持つ日本語学習者に対して，統一課題で収集されたデータ，そして日本語能力別にその使用の変化を見る研究は管見の限り行われていない。本稿は，この課題に対し，調査・分析を行う。

３．学習者コーパス調査

３．１．調査対象

本稿では，I-JAS の第二次データを対象に調査を行う。第二次データには，英語（35 名），トルコ語（35 名），中国語（35 名），韓国語（35 名）を母語とする海外の日本語学習者，および国内の教室環境学習者（10 名）と自然環境学習者（10 名），そして日本語母語話者（35 名）のデータが含まれている。これらのデータのうち，母語の違いにのみ焦点を当てるため，国内の教室環境学習者と自然環境学習者のデータを除いたデータを調査対象とする。

それぞれの学習者の日本語能力については，母語ごとに分布が異なる。李他(2015:58)の分類に基づき（表１），対象となる学習者について J-CAT のスコアによるレベル分けを行い，その結果をまとめたものを表２に示す。

表１：「J-CAT」のレベルの目安（李他 2015:58）

得点	レベル	説明
0-100	初級	基本的な考えを述べることができる
101-150	中級前半	日常的な会話をこなすことができる
151-200	中級	
201-250	中級後半	
251-300	上級前半	学術的・専門的なコミュニケーションができる
301-350	上級	
351-400	日本語母語話者相当	

表２：学習者の母語別日本語能力

日本語能力／母語	初級	中級			上級			計
		中級前半	中級	中級後半	上級前半	上級	母語話者相当	
英語	7	13	10	4	1	0	0	35
トルコ語	10	10	11	4	0	0	0	35
中国語	0	1	5	10	16	2	1	35
韓国語	1	4	1	6	12	10	1	35
計	18	79			43			140
	18	28	27	24	29	12	2	

表２からわかるように，韓国語・中国語では上級学習者が多く含まれるが，英語・トルコ語にはほとんど含まれない。そのため，分析の際は日本語能力による差も検討する。

次に，調査対象とする課題について説明する。I-JAS には，7 種類 12 タスクの課題が準備されているが（迫田他 2020），そのうち対面調査で行った表３のタスクが本稿の調査対象である。これらのうち，網掛けで示した絵描写課題(D)を除いたタスクを考察対象とする。絵描写課題については，トルコ語母語話者と英語母語話者でデータがない（もしくは一部のみである）ためである。

表３：収集データとタスク記号（I-JAS 調査概要より[2)]）

タスクの種類	タスク記号	データの種類
ストーリーテリング（２タスク）	ST1，ST2	発話データ
対話	I	
ロールプレイ	RP1，RP2	
絵描写	D	
ストーリーライティング（２タスク）	SW1，SW2	作文データ

３．２．調査方法と分析対象

3.1 節で示した調査対象に対し，国立国語研究所のコーパス検索アプリケー

ション『中納言』を用いて，(14)のような検索を行い，データを収集した。

(14) 数詞（前方１語）＋（キー）品詞=名詞-接尾辞-助数詞

この方法には，曹(2023)が指摘するように，問題がある。I-JAS の形態素解析では，全ての助数詞が助数詞として品詞が付与されていない現状があり，そのため全ての助数詞の結果が得られない点である。しかし，日本語の助数詞の定義とその範囲について意見が分かれている現状もある（眞野 2021)。本稿は，この問題を課題として把握した上で，予備的調査として上記の調査を行った。

検索の結果，得られたデータを，母語別に表４にまとめる。

表４：助数詞の調査結果（総数）

助数詞／母語	日	歳	つ	個	匹	本	枚	その他
英語	81	102	31	0	1	0	0	0
トルコ語	138	46	29	1	0	0	0	0
中国語	97	53	58	1	5	5	1	0
韓国語	109	60	59	4	6	2	0	0
日本語母語	110	51	99	15	4	22	1	5

表４から分かるように，言語ごとにかなり使用頻度に差が見られるものの，学習者間で使用される助数詞の傾向は類似している。

ただし，すべてのグループで使用頻度の高い，「日」と「歳」については，分析対象から除くことにした。その理由は２つある。１つ目は，タスク内での質問項目の影響である。迫田他（2020:38)で示された対話タスクにおける対話の流れには，「昨日の１日の出来事【過去】」や」出身地の誕生日（伝統行事）の祝い方【現在および過去】」などが含まれており，「日」と「歳」の使用については，これらの質問項目に影響を受けた可能性が高かった。また，「日」については，ロールプレイタスク１の影響も観察された（次ページの図１を参照)。2つ目の理由は，これらの助数詞の用法である。「日」と「歳」は，他の類別詞と

は異なり，通常，対象名詞の数量を指定するのではなく，単独で使用され，そのものを表す名詞の数量は表せないという特徴がある（＊３日の日／＊３歳の年齢）。これらの理由から，本稿の分析対象からは外すこととした。

また，日本語母語話者にのみ観察された助数詞（その他：隻，編，次）についても，分析対象とはしないこととする。

《ロールプレイ（１）》
あなたは，日本料理店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり，料理を運んだりしています。勤め始めてからずっと接客の仕事をしてきたので，この仕事にもすっかり慣れ，知り合いのお客様も増えました。
今は，１週間に三日アルバイトをしています。しかし，忙しくなってきたので，１週間に二日に変更したいと思っています。そこで店長に言って三日から二日に変えてもらうように頼んでください。
（準備ができたら始めますから，準備ができたら教えてください。）

図１：ロールカード１（迫田他 2020:39）

この調査結果には，基本的な有生物（人間）を対象とする類別詞「人」は含まれなかった。「人」は，助数詞としては形態素解析されていないためである。しかし，これまでの I-JAS の調査においても，「人」は非常に多く使用される類別詞の一つであり（曹 2023），かつ類別詞の体系において「匹」とグループをなすものであるため，追加で(15)のような語彙素検索を行い，分析対象とした。

(15) 数詞（前方１語）＋語彙素「人」

さらに，学習者のデータには繰り返しが多く含まれることがわかったため，得られたデータから，(16)のように同じ助数詞の繰り返しが含まれる場合は，最後のものだけを数えることにした。(16)のように，異なる助数詞に言い直した場合は，両方を分析対象とする(()内には，タスクと参加者 ID を示す)。

(16) a. ...犬を，ま<u>一匹</u>，えー犬を<u>一匹</u>飼っています。　(ST1, KKD24)
b. ...でもー<u>三つ</u>，あの<u>三日</u>は...　(RP, EAU14)

この結果，本稿が分析対象とする類別詞の使用総数は，表５の通りとなった。

表５：分析対象とする類別詞の使用総数

母語＼類別詞		有生物		無生物				計
		人	匹	つ	個	本	枚	
日本語学習者	英語	18	1	31	0	0	0	50
	トルコ語	30	0	29	1	0	0	60
	中国語	17	5	58	1	5	1	87
	韓国語	37	6	59	4	2	0	108
日本語母語話者		49	4	99	15	22	1	190

これらの類別詞について，各属性（母語・日本語能力）ごとに，使用頻度，使用された類別詞の種類,類別詞の位置について分析し,その結果を４節で示す。

４．結果と分析

４．１．類別詞の使用頻度

まず，類別詞の使用頻度について，母語別，日本語能力別に分析を行う。表６は，母語別，頻度順に類別詞の一人当たりの平均使用頻度を示したものである。日本語母語話者の類別詞使用頻度は，学習者に比べ非常に高いことが分かる[3)]。

表６：母語別類別詞使用頻度

母語		使用数	一人当たりの平均使用頻度
日本語母語話者		190	5.43
日本語学習者	韓国語	108	3.09
	中国語	87	2.49
	トルコ語	60	1.71
	英語	50	1.42

学習者間の差について検討するため，一元配置の分散分析を行なった。

表７：母語別類別詞平均使用頻度の比較
（一元配置分散分析，HSD 法による多重比較）

母語		標準偏差	F 値	P 値	多重比較：p 値
1	韓国語	2.88	4.44	p<.01	1 ＞ 3 ： p ＜.05 1 ＞ 4 ： p ＜.05 ※他は 5%水準で有意差なし
2	中国語	1.87			
3	トルコ語	1.98			
4	英語	1.25			

その結果，有意な主効果が認められ，母語によって類別詞の使用頻度には差があることが示唆された。さらに，HSD 法による多重比較の結果，韓国語母語話者がトルコ語・英語母語話者より有意に多く類別詞を使用することが明らかになった。しかし，先に見たように，母語により学習者グループ間で日本語能力に差があるため，次に日本語能力別に分析を行う。

表８は，学習者の日本語能力ごとに類別詞使用頻度をまとめたものである。

表８：日本語能力別類別詞使用頻度

日本語能力		人数	使用数	一人当たりの平均使用頻度	
上級	日本語母語話者相当	2	9	4.5	2.84
	上級	12	43	3.58	
	上級前半	29	79	2.72	
中級	中級後半	24	52	2.17	1.99
	中級	27	48	**1.78**	
	中級前半	28	57	2.04	
初級	初級	18	17	0.94	0.94

例外がないわけではないものの，日本語能力が上であるほど，類別詞の使用頻度が高い，つまり日本語母語話者の使用に近づくことがわかる。差を見るため

に，一元配置の分散分析を行なった結果を，表９に示す。

表９：日本語能力別類別詞使用頻度の比較
（一元配置分散分析，HSD 法による多重比較）

母語		標準偏差	F 値	P 値	多重比較：p 値
1	上級	2.22	7.14	p<.01	1 > 2 ： p <.05
2	中級	2.14			1 > 3 ： p <.05
3	初級	1.27			2 = 3 ： n.s.

結果から，有意な主効果が認められ，日本語能力によって類別詞の使用頻度には差が見られることがわかった。HSD 法による多重比較の結果，上級者は，中級者・初級者と比較し，有意に使用頻度が高いことがわかった。この結果を踏まえると，母語別の結果で観察された差異は，韓国語・中国語には上級者が多いことから生じている可能性がある。

この点を明らかにするために，データを中級学習者のものに限定して，母語による差がないかを検討する。表 10 に結果を示す。

表 10：中級学習者の母語別類別詞使用頻度

母語	人数	使用頻度	一人当たりの平均使用頻度
韓国語	11	34	3.09
中国語	16	32	2.00
トルコ語	25	51	2.04
英語	27	40	1.48

表 10 は，表６と類似の傾向を示しており，日本語能力だけではなく，母語による影響も存在することが示唆される。言語の類型的特徴を考えると，日本語と同様に数量類別詞を持つ言語であり，かつ似た特徴を持つ韓国語の話者で使用頻度が高く，類別詞を持たない英語話者で使用頻度が低いことは，興味深い結果である。今後，より多くの言語を対象に検証する必要がある。

４．２．類別詞の種類

次に，使用された類別詞の種類が，日本語能力と関わるかを検討する。表５から分かるように，使用された類別詞の種類については，母語による差はほとんど観察されなかったが，日本語能力と関係はあるのだろうか。表 11 に，日本語能力別に各類別詞の使用頻度を示す。

表 11：日本語能力別の各類別詞の使用頻度

日本語能力	人数	有生物		無生物（形状類別詞）				計
		人	匹	つ	個	本	枚	
日本語母語話者相当	2	5	0	2	2	0	0	9
上級	12	12	2	25	1	2	1	43
上級前半	29	27	9	36	2	5	0	79
中級後半	24	13	1	38	0	0	0	52
中級	27	9	0	38	1	0	0	48
中級前半	28	24	0	33	0	0	0	57
初級	18	12	0	5	0	0	0	17
計	140	102	12	177	6	7	1	305

２人しかいない日本語母語話者相当の学習者を除くと，日本語能力で上であるほど，使用する類別詞の種類が増えることが分かる。今回の調査は，対象を限定して行なったものであるが（注 3 も参照されたい），さらに対象とする類別詞を増やすことにより，この変化については明らかにすることが必要である。

４．３．類別詞の用法

最後に，学習者が類別詞をどのような統語的位置で使用しているかについて，その用法から検討する。２節で示したように，日本語の類別詞は統語的に多様な位置に生じることができる。日本語母語話者のデータで観察された類別詞の用法を例と共に，(17)に示す。(18)のように，複合語の一部として生じていた例も観察された。

(17) a. 単独：あー今三人なんですね。　(RP2, JJJ20)

b. 連用（修飾）：…で年が六つ離れた妹がいるんですけど…　(I, JJJ06)

c. 連体（修飾）：たとえば一つ**のボール**を，二人で一緒に蹴る…　(I, JJJ48)

d. 同格：万願寺からモノレール一本で　(I, JJJ28)

e. 並置：えーっとまずその接客のほうをしたいってゆうのには二つ**理由**があありまして…　(RP2, JJJ28)

f. 被連体（修飾）：今でもそれがあのー，自分の研究の**ベースの**，一つになってたりしますね。　(I, JJJ05)

(18) 複合（語の一部）：もともとうちは，おじいちゃんおばあちゃん，で|弟ももういて，六人家族だったんですよ，　(I, JJJ32)

まずは，学習者の母語別に，その使用頻度を次ページの図２にまとめる。用法の順は，日本語母語話者の使用頻度の多い用法の順となっている。

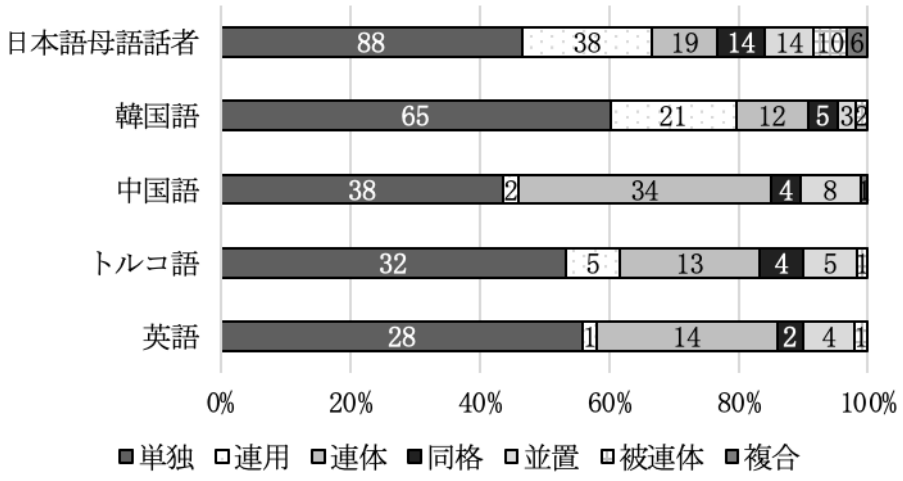

図２：類別詞の用法別使用頻度（母語別）

図２から分かるように，日本語母語話者と比べ，（韓国語を除いた）学習者の使用は，「単独」「連体」に大きく偏る傾向がある。また，「並置」の割合の多さも

特徴的である。一方,韓国語母語話者の傾向は日本語母語話者に類似しており,中でも「連用」の多さは他の学習者とは異なる傾向を見せている。これには同様の位置で類別詞の使用が可能である，韓国語の影響が考えられる。

次に，日本語能力別に各用法の使用頻度を，表 12 にまとめる。

表 12：日本語能力別の類別詞用法別使用頻度

	単独	連用	連体	同格	並置	被連体	複合	計
母語話者相当	7	2	0	0	0	0	0	9
上級	26	6	5	1	2	2	1	43
上級前半	34	10	21	8	6	0	0	79
中級後半	20	7	17	2	4	2	0	52
中級	27	2	17	1	1	0	0	48
中級前半	37	2	13	2	3	0	0	57
初級	12	0	0	1	4	0	0	17

表 12 から分かるように，２人しかいない母語話者相当を除き，日本語能力が上の学習者ほど，様々な位置で類別詞を使用できている傾向が見てとれる。これは，習得が進むにつれ，多くの用法を習得していく証拠となるだろう。

また，この結果は，水口（2004），岩田（2013)が「連用」から類別詞が前置したと考える「並置」について，再検討を促すものでもある。表 12 において，「連用」が初めて観察されるのは中級前半である。それに対し，並置は初級から使用が観察される。学習者の例を，(19)にあげる。

(19) a. 三人，五人，友達，あー，います。(I，EUS26 英語母語話者，初級)
b. はい。いつ，飛行機を五つ，乗りました。
(I，KKD30 韓国語母語話者，中級前半)

学習者における「並置」の使用は,「連用」からの前置と考えるのではなく，すでに使用されている「単独」の場合と同様，単独で使用された類別詞が対象の

名詞句と並置されていると考える必要性が示唆される。学習者が「並置」と「連用」を区別しているかも含め，今後各用例の分析が必要である。

５．まとめと今後の課題

本稿では，類別詞について異なる類型的特徴を持つ４つの言語を母語とする日本語学習者の類別詞使用について比較を行い，母語の影響と日本語能力による差異を指摘し，どちらも類別詞使用に影響を与えていることを主張した。

類別詞習得の過程とそれに影響を与える要因を解明するためにはより多くの言語を母語とする日本語学習者に対し，調査を行うことが必要である。本稿は，そのための予備的調査として，類別詞の習得過程を解明するための I-JAS を使用した調査における課題も明らかにした。今後，学習者の誤用を含めた使用を観察し，比較することで，学習者に共通して見られる特徴と差異とそれに影響する要因の解明を目指したい。

注

１）助数詞の定義および範囲の問題については，東条(2014)，田中(2015)，眞野(2021)などを参照されたい。

２）https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ijas-survey-outline.html

３）曹 (2023)の結果との差は，調査方法の差により生じている (3.2 節参照)。

使用コーパス

国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language)』(https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/)

参考文献

飯田朝子(1999)『日本語の主要類別詞』東京大学人文社会系研究科博士論文.

岩田一成(2013)『日本語数量詞の諸相』くろしお出版.

奥津敬一郎(1983)「数量詞移動再論」『人文学報』160: 1-24.

影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之(2011)「名詞の性質と数の数え方」影

山太郎編『日英対照　名詞の意味と構文』10-35, 大修館書店.
倉品さやか(2009)「「一」を含む数詞節の習得―中国語母語日本語学習者の作文データに基づく調査―」『Working Papers』17:39-49. 国際大学.
迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬(2020)『日本語学習者コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』くろしお出版.
曹卓琦(2023)「コーパスから見た中国語を母語とする日本語学習者における数量表現使用の問題点」『統計数理研究所共同研究リポート』465:135-154.
田中佑(2015)『近代現代語における新たな助数詞の成立と定着』博士論文. 筑波大学大学院人文社会科学研究科.
東条佳奈(2014)「名詞型助数詞の類型―助数詞・準助数詞・擬似助数詞―」『日本語の研究』10(4), 16-32.
西光義弘・水口志乃扶（編）(2004)『類別詞の対照』くろしお出版.
濱野寛子・佐野香織(2008)「日本語学習者の助数詞の習得に関する調査」『言語文化と日本語教育』35:49-52, 日本言語文化研究会.
松本曜(1991)「日本語類別詞の意味構造と体系―原型意味論による分析」『言語研究』99: 82-106.
眞野美穂（2021)「第二章　助数詞と名詞のつながり」岩男考哲・坂本智香・建石始・益岡隆志・松瀬育子・眞野美穂『名詞研究のこれまでとこれから』50-85, くろしお出版.
水口志乃扶（2004)「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶（編)『類別詞の対照』61-77,くろしお出版.
李在鎬・小林典子・今井新悟・酒井たか子・迫田久美子(2015)「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』18:53-69, 凡人社.
Aikhenvald, A. Y. (2000) *Classifiers*. Oxford: Oxford University Press.
Downing, P. A. (1996) *Numeral classifier systems: the case of Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
Lee, C. (2021) Definiteness, specificity, and genericity in numeral classifier languages. In C. Lee, Y-W. Kim, and B. Yi (Eds.) *Numeral Classifiers and Classifier Languages: Chinese, Japanese, and Korean*

(pp.121-136). NY: Routledge.

Matsumoto, Y. (1993) Japanese numeral classifiers: A study of semantic categories and lexical organization. *Linguistics* 31, 667-713.

Turgay, T. (2020) *Classifier Constructions of Turkish*. Ph.D Dissertation. Boğaziçi University.

Yi, B. (2021) Numeral classifiers and diversity of classifier systems. In C. Lee, Y-W. Kim, and B. Yi (Eds.) *Numeral Classifiers and Classifier Languages: Chinese, Japanese, and Korean* (pp.6-39). NY: Routledge.

付記

本研究は，JSPS 科研費（18K00615, 21K00761）の助成を受けたものである。

（人文学研究科准教授）